令和6年度新時代の英語教育推進事業

外部講師の先生方による指導・助言

～中学校編～

山形県教育局義務教育課

ご指導いただいた先生方

佐藤　博晴　先生　（山形大学）

小泉　有紀子　先生　（山形大学）

金森　強　先生　（文教大学）

阿野　幸一　先生　（文教大学）

阿部フォード　恵子　先生（CALAグローバル）

酒井　英樹　先生　（信州大学）

太田　洋　先生　（東京家政大学）

向後 秀明 先生（敬愛大学）

　英語教育実践リーダーは、年間を通じて様々な視点から実践へのご指導をいただきました。

　指導・助言の一部をご紹介しますので、先生方もご自身の実践を振り返り、授業改善に役立ててください。

ねらいを明確に

生徒のどんな力を伸ばしたいのかを焦点化して指導しましょう。

（例）「身の回りのユニバーサルデザインについて紹介する」

・モデル文を参考に、いくつかの例を紹介する文を書く（話す） ＝ 知識・技能

・紹介文で使えそうな表現を練習して、使い方を理解する ＝ 知識・技能

・紹介したいユニバーサルデザインを見つけ発表する ＝ 思考・判断・表現

・デザインの特徴を伝える適切な表現を考える ＝ 思考・判断・表現

中間指導について

・「言いたいけれど言えないこと」を共有するだけでなく、「目標に向かっているか」、「目標の達成にはどんな内容をどう言えばよいか」などを生徒と確認しましょう。

・生徒の参考となる英文や発話がある場合、板書や電子黒板で可視化して、その英語を声に出したり、自分の英文を推敲したりすることも効果的です。

目的・場面・状況の設定は

生徒の思考を深めるために、次のことなどを意識して設定してみましょう。

・生徒にとって取り組みやすい設定か

・Authenticな場面か

・伝え合うなどの理由が明確か（コミュニケーションを行う必然性）

・背景まで考えが及ぶか

（例）ALTが家族旅行をしたい ＝ 家族構成、興味は？ と考えが働く

ALTによる指導

例えば、次のような指導も考えられます。

（活動前）　自分の情報を開示する。（ALTがコミュニケーションの相手の場合）

（中間指導）生徒の発話に対して英語でフィードバックする。

生徒の発話が理解できないときは、そのことを伝える。＝ 生徒がどうしたら伝わる内容や表現になるかを考えるきっかけになる。

（活動後）　印象に残った発話について、その表現と理由を全体共有する。

教科書本文について

・教科書の内容について、理解や考えを深める機会を設けるとよいでしょう。

（例）「～ということはどこからわかる？」「～という目的で使えそうな表現はどこ？」「あなたならどう？」（賛成か反対か など）

・社会的な話題は、その話題に対する知識が無いこともあるため、背景知識を与えるなどして読むハードルを下げるとよいでしょう。

語句の定着は

・聞いて意味が分かる→聞いて発音できる→文字を見て発音できる→文字を見て意味が分かる→書ける、という流れで習得していくので、書くことを急がず、まずは聞いて分かるようにしていきましょう。

・新出語句（や文法事項）は、その単元だけで定着させようとせず、長期的にくり返し触れながら学習していくことが大切です。

思考を促す手立て

・選択できる自由度がポイント

「この単元で扱った語句や文法を使わせたい！」という思いが強いと、時に生徒の思考・判断の場がなくなってしまいます。

→ 既習の表現も自由に使えると、表現したい気持ちも大切にできます。

（例）小～中の教科書から表現を選ぶ（使いたい表現をhuntする）

＝ 学び方を学ぶことにもつながります

題材の導入について

（例）ユニバーサルデザイン（UD）の話題

教師の一方的なUDについての説明よりも...

→「動物園で取り入れられているUDやある製品の新旧デザインの比較」など、写真を見たり比べたりしながら導入を行う

生徒が自分で考えたり、生徒同士のやり取りを促すことにつながります。

やり取りの継続・発展のために

「質問する力」を高めることが大切です。

（例） A : What are your hobbies?　　B : I like jogs.

この後に、Aさんはどのようにやり取りを続けるでしょう？

→ 沈黙、「Why?」とだけ聞く、話を変えるなど様々ですが、「Do you ～?」を何度使ってもよいので、質問を作ってやり取りを続ける力を高めていきましょう。

教師と生徒のやり取りについて

生徒とのやり取りでは、次のことなどを意識するとよいでしょう。

・やり取りを通して、生徒の理解度を図ること

・どんな表現を用いると理解しやすいか、どんな質問をすると英語で答えられそうかなどを想定して発話すること

・間違いを恐れず英語を使うことを楽しめるようにサポートすること

・生徒自身が間違いに気付けるよう、たっぷりやり取り・リキャストすること

“Big voice!”と言わなくても

例えば、ペア活動で

→ 「横ペア」「縦ペア」に加えて「斜めペア」で会話を行うと、

「斜めペア」での会話は声が重なって聞こえづらくなるため、自然と大きな声で相手に伝えることを意識できるでしょう。

実態に応じて、意図的に仕組んでみましょう。

SpeakingとWriting

実際に活用できる英語を身に付けるうえでは、「話す → 書く」の順序を意識して指導を行いましょう。

「言ったことを書く」を繰り返し、最後に書いてまとめるようにするとよいですよ。

メモについて

　メモをもとに話す活動を行う場合は、英文を読む活動にならないよう指導の工夫が必要です。

（例）

・ ワークシートに「・」を打って箇条書きを意識できるようにする

・ 完全な文ではなく、キーワード程度を書くように促す

・ 考えを整理する時間（メモをとる時間）をメモをとれる程度に設定する

できるようになったことに意識を

英語をアウトプットする際は、「sやes」、過去形などが抜け落ちるのは当然のことと理解しましょう。

その上で、間違いを指摘することに注力するよりも、使えるようになったことに気付いて褒めてあげましょう。

練習からリアルに

パターンプラクティスに終始していませんか？

→ （例）「三人称単数現在形の文」の練習

クラスメートや学年外の先生について知っていることについて、「使いながら“s”を付けることに気付く」「生徒が表現してみて、必要に応じて指導を行う」など、言語材料についての練習でも、言語活動の目的や言語の使用場面を意識できるようにしましょう。

思考・判断・表現の評価①

▲「三人称単数現在形を用いて、あこがれの人物について発表している」

三単現のsなど、言語材料を正しく用いて発表している ＝ 知識・技能の側面

→「…のために、具体的な情報を付け加えてあこがれの人物について発表している」

＝ 思考・判断・表現は、特定の言語材料を指定せずに、目的・場面・状況に応じた内容になっているかを評価しましょう。（話すこと・書くこと）

思考・判断・表現の評価②

三人称単数現在形を正しく用いることができるか（知識・技能）を見る場面も必要ですが、例えば、

① 三単現のsはついているが発表内容がうすい

② 三単現のsは抜けることもあるが発表内容が豊か

これらを「思考・判断・表現」の観点であればどう評価するか、適切に判断しましょう。

「指導・助言　～小学校編～」も、授業改善のヒントになる内容がたくさんあります。

小中接続の観点からも、ぜひ参考にしてください。